

漢字の教え方

岸 陽 子

漢字は漢民族によって生み出され、かれらの間で発達した文字で、それが日本にもたらされたのは今から千数百年も前のことといわれている。やがて中国大陸との往来がさかんになり、漢文化の摂取がすすむにつれて、おびたしい漢語が日本人の生活の中に流れ込んだ。わたし達の祖先は漢字を巧みに活用してかなを創り出し、漢語を存分に駆使して日本語を豊かにしていった。今日でもわたし達が日常読み書きする文章は、全体の文節の約40%が漢語を含む文節から成り立っている。漢字、漢語は本来、外来の文字でありことばではあっても、長い年月の間にわたし達の祖先によって血肉化され、日本の文字、日本のことばとして生きているのである。したがって漢字・漢語教育は外国人を対象とする日本語教育の場においても重要な一課程として、その科学的な指導法が確立されなければならない。

今日では漢字制限が行なわれているとはいえ、中国人、朝鮮人以外の外国人にとって 2000 字前後(当用漢字 1850 字以外に新聞などで常用されている漢字は約 225 字)の漢字を習得し、それらの漢字の組みあわせから成るおびたしい漢字語いを理解し駆使し得るようになるのはなみたいいことではない。かれらが日本語を習得しようとする際にもつとも大きな負担となるのは漢字、漢語の習得であるといえよう。どうすれば漢字を体系的、能率的、効果的に習得させることができるか、これは日本語教育にたずさわる者に課せられた一つの大きな課題である。そこで、早稲田大学の外国人学生に漢字教育を行なった経験を基にして一つの試案を提出し、今後より有効な方法を確立するための手がかりとしたい。

1. 書けねばならぬ漢字と読めればよい漢字をわけて考える。

今日では漢字制限が行なわれているので、当用漢字 1850 字を習得すべき目標として学習させれば、いちおう社会で常用されている漢字を使いこなすことができる。もちろん実際には制限外の漢字が相当用いられているし、また文学作品や専門的な書物を読む場合にはかなりの量に及ぶ当用漢字外の漢字の知識が要求される。しかしこれらの漢字は読めればよい漢字であって書けねばならぬ漢字とはわけてあつかったほうがよい。そのほか、社会で慣用されている熟字訓のことは、たとえば「田舎」「支度」「何時」「何処」「大人」などは、それらを「いなか」「したく」「いつ」「どこ」「おとな」と読み、その意味を理解していれば十分であって、表記する場合はかなを用いればよい。書けねばならぬ漢字は当用漢字の枠内で十分である。さらに当用漢字の中にも使用度の低い漢字が相当ある。たとえば当用漢字を制定するさいに憲法に用いられた漢字はすべて採用するという原則を守ったため、「弾劾」のように日常生活にほとんど必要のない漢字が採用されている。したがって当用漢字の中でも書けねばならぬ漢字と読めればよい漢字とを区別してあつかったほうが効果的である。

2. 漢字の字形、意味、読みかたを統一的に把握させる

(1) 漢字の組成を理解させる。

漢字には構造法則がある。したがってほとんどの漢字は構成要素に分解することができる。漢字の構造法則を把握していれば学習者は個々の漢字の組成を理解し、字形と意味を関係づけてとらえ、字形を正確に記憶することができる。たとえば「初」の扁「ネ」を「ネ」と書いたり、旁「刀」を「力」と書いたりするようなあやまりは減少する。

漢字の構造法則に関しては、西暦 98 年、中国最古の字典〈説文解字〉をあらわした許慎の分類にしたがってつぎのように四つの造字原則を説明すればよい。

(A) 象形文字

自然、人間、動植物、道具など形あるものの特徴をとらえてかたどった

絵文字である。あらゆる漢字の基本となる文字でつぎの三種に分類できる。

(a) ものの自然のままの形をかたどった文字。

(例) 山→山 竹→竹 鳥→鳥 子→子 門→門 皿→皿

(b) 二つのものの形を組みあわせてべつの一つのものをあらわした文字。

(例) 皿→血(皿に血を盛った形。古代中国では祭祀にいけにえの血を皿に盛って供えた)

(c) ものの形の変化をかたどって、ある状態をあらわした文字。

(例) 入→入(人がからだをまげた形をかたどったもの。古代中国においては穴居生活だったのでからだをまげて住居に入る姿をかたどって「入る」という意味をあらわした)

(B) 指事文字

象形文字を利用したり記号を用いたりして抽象的な事態をあらわした文字。許慎は「見て知るべく、察して意を見る」と説明している。つぎの二種に分類できる。

(a) 記号を用いた単純な指事文字

(例) 一→上 丿→下 回→回

(b) 二つ以上の観念を結びつけて一つの事態を示した文字

(例) 本→本(木を示す象形文字の根本の部分に一印を加えて「もと」の意をあらわしたもの)

末→末(木を示す象形文字の枝先の部分に一印を加えて「まつ」の意をあらわしたもの)

(C) 会意文字

二つ以上の既成の文字(象形あるいは指事)を組みあわせて、その意味の結合によってべつのもう一つの意味をあらわした文字。したがって象形文字、指事文字のあとに形成された第二義的な文字といえる。

(例) 日+月=明(日も月も照らすことからそれら二つを並列させて

あかるいという意味をあらわす)


(例) 木+木+木=森(三は多い数をあらわす。樹木が密生しているところ。)

(D) 形声文字

会意文字と同じく、象形、指事文字を基にして形成された第二義的な文字で、一部に「イ」「シ」「月(肉)」など事物の類別を示す部分を含み、一部に音と基本義を示す音符をもつ。音符は単に音を示すばかりでなく、その音によってあらわされる基本的な意味を示している。したがって同一の音符をもつ漢字群は共通の基本的意味を内包する。

(例) 「包」を音符とする形声文字

抱一胞一泡一袍一砲一飽

「包」は篆書ではと書きあらわす。〈説文〉によれば胎児が母親の胎内で内臓につつまれている姿をかたどったもので、「つつむ」「まるくふくれあがる」という意味をあらわしている。「包」を音符とする一連の形声文字群はつぎに説明するように、いずれも「包」のあらわす意味、「つつむ」あるいは「まるくふくれあがっている」を基本的意味として共有している。

抱一両手ですっぽりつつみこむ動作をあらわす。

胞一胎児をつつんでいる皮膜をあらわす。

泡一空気をつつんでまるくふくらんだ水泡をあらわす。

袍一からだをつつむ衣服をあらわす。

砲一火薬をつつんだ玉をあらわす。

飽一食物をおなかの中にいっぱいにつめこんだ状態をあらわす。

(2) 形声文字に関しては、共通の意味を内包する文字群をあつめてグループをつくり、相互に関連づけて習得させる。

形声文字は数も多く、(当用漢字 1850 字のうち形声文字は 1065 字)字形と意味を直接結びつけてとらえにくい文字群である。しかし上に述べたような特徴、つまり、同一の音符を含む文字群はいずれもその音符のあら

わず意味を基本的意味として共有しているという点を利用して、同じ音符をもつもの、いいかえれば基本義を同じくするものを一つのグループにまとめ、それぞれの文字が内包している基本的意味をひき出し、相互に関連づけて教えれば系統立った理解が可能になり字形を正確に記憶することができる。さらに、同一音符を含んでいなくとも、同音、または近似した発音の文字群は共通の基本的意味をもつ場合が多いのでそれらをひき出して文字グループをつくることもできる。なお、藤堂明保氏の労作「漢字の語源研究」(学燈社)はおたがいに似た語形と共通の基本的意味をもつ形態素のグループを単語家族として解説したもので、上にのべたような文字グループの作成にはたいへん役に立つ研究ゆえ大いに活用すべきである。当用漢字の中の形声文字のうち約半数は上にのべたような方法でグループをつくることができるが、ここでは教えたの一例をあげるにとどめる。

(例)「莫」グループ(暮、墓、幕、慕、募、膜、漠、模)

・莫→𣎵

〈説文〉には「日のまさに冥からんとするなり。日の𣎵(くさむら)の中に在るに従う」と説明している。つまり草原の中に日がかくれるさまを描いて「日がかくれる」意味をあらわした会意文字である。「莫」を音符としてもつ文字群はいずれも「かくれて見えない」という基本義を内包している。

・暮(日+莫)音(ボ)

訓(ク)れる。(ク)らす。

後世において「莫」が「ない」という否定詞として用いられるようになったのでその原義をあらわすためさらに「日」が加えられた。太陽が草むらの中にかくれるという意味をあらわす。

(例文)

もう日が暮れました。

元気で暮らしています。

日暮れになるとおかあさんを思い出します。

夕暮れゆぐれの空にからすが飛んでいます。

お歳暮せいまるをとどけました。

◦墓はか(土+莫)音(ボ)

訓(ハカ)

死体を土でおおってかくしたところ。

(例文)

京都に父の墓はかがあります。

きのうは父の命日めいにちだったので墓参りはかまいに行きました。

あそこへ行くには墓場はかば(墓地ぼち)をとおらなければなりません。

きょうはおひがんなので墓参ぼさんの人たちがおおぜい電車に乗っています。

先生の墓前ぼぜんにぬかづいていっしょうけんめい勉強することをちかいました。

◦幕まく(巾+莫)音(マク, パク)

訓(——)

外からおおって見えなくするためのきれ

(例文)

舞台には青い幕がたれさがっています。

(幕府ばくふ, 幕末ばくまつ, 幕僚ばくりょう)

◦慕ぼ(心+莫)音(ボ)

訓(シタ)う

目の前にいない人を心で求める。

(例文)

こどもが母親を慕したって泣いています。

(慕情ぼじょう, 迫慕ついま, 敬慕けいぼ)

◦募ぼ(力+莫)音(ボ)

訓(ツノ)る

まだいない人をあつめる

まだないものをあつめる

〈例文〉

学生を募^{つひ}ります。

学生を募集^{ほしゅう}します。

かのじょはビューティコンテストに応募^{おうぼ}しました。

不幸な人たちのために募金^{ぼきん}します。

◦膜（肉＋莫）音（マク）

訓（——）

内臓をおおいかくしている皮膜

（例文）

鼓膜^{こまく}が破れそうな大きな音がしました。

（粘膜^{なんまく}）

◦漠（水＋莫）音（バク）

訓（——）

北方の流砂，水がないという意味をあらわす。

（例文）

砂漠^{さばく}には草一本生えません。

◦模（木＋莫）音（モ，ボ）

訓（——）

原義は粘土の上にかぶせて陶器の素型をつくる枠。上からおおうのでやはり「かくれて見えない」という意味を内包している。ただし、後世においてはもっぱら「かたどる」という意味に用いられる。

（例文）

飛行機の模^も型をつくりました。

かれはわたしたち学生の模範^{もはん}です。

きれいな模^も様のカーテンを買いました。

きのう、入学試験の模擬試験を受けてみました。

(3) 語い教育と結びつける。

漢字は一つの文字が一つの語をあらわしたもので、たとえば「行く」「来る」に用いられている漢字は「いく」「くる」という語いと結びつけて指導しなければならない。文字教育は常に語い教育と結びつけて行なうべきである。とくに日本語の表記として用いられる漢字は音訓両様の読みかたをするものが多いので(当用漢字の中で音訓両様の読みかたをする漢字は 975 字)語い教育と結びつけて読みかたを定着させていかなければならない。音訓両様の読みかたをする漢字は最初は訓読みで教えて語の意味を把握させ、そのあとで熟語を与えていけば効果的である。「たとえば「休」という漢字はつぎのように指導する。

- そろそろ休みしましょうか。
- 人が木のそばで休んでいます。
- 今学期はいちども休みませんでした。
- 一日休めばそれだけ日本語の勉強がおくれます。
- 日曜は休みです。
- もうすぐ夏休みです。
- ちょっと休むことを休憩といいます。
- 休憩するときには休憩室に行きます。
- 休みの日を休日ともいいます。
- 休みをもらうことを休暇をとるといいます。
- 長い間学校を休むことを休学、しごとを休むことを休業といいます。

とくに漢字が日本語の中で占める大きな役割はその造語力にあることを忘れてはならない。したがって漢語の熟語を与えるさいにはただ機械的に与えるのではなく語構成意識を育てながら与えていかなければならない。また漢語の熟語は日常生活に密着したものから疎遠なものまでさまざまであるから、提出順位を考えて身近なものから習得させていくほうがよい。

そのさいかならずその熟語を用いた短文を与えることが必要である。

3. 書かせる場合には厳密さを要求しないこと。

漢字は全体で個性ある形を成しているゆえ、書いた時に多少のずれが生じて読みちがえるおそれはない。たとえば、つぎのような場合はあまり厳密さを要求する必要はない。

- (1) 長短に関して。 無—無
「無」の中の一線は長くても短かくてもよい。
- (2) 曲直に関して。 手—手
「手」の字のたての線は垂直でも曲がってもよい。
- (3) つけるかはなすかに関して。 月—月
「月」の字の中の二線はつけてもはなしてもよい。
- (4) とめるかはねるかに関して。 内—内
「内」の字の右下ははねてもとめてもよい。
- (5) とめるかはらうかに関して。 用—用
「用」の字の中線はとめてもはらってもよい。
- (6) 方向に関して。 風—風
「風」の字の中はノ印でも一印でもよい。
- (7) その他。 雨—雨
「雨」の字の中の点々はどんな形でもよい。

ただし、たとえば、大—犬、王—玉、千—干、天—夫のように一点一画が区別のきめてとなるものは厳密さを要求しなければならない。